



連載 河北潟の仲間たち ⑧



第8回 ノスリ



ノスリは鷹の仲間です。河北潟には冬になると、周辺の山地や大陸から20羽から60羽くらいのノスリがやってきます。河北潟干拓地は、ノスリにとって好適な越冬場所を提供しているようです。

「図説日本鳥名由来辞典」(菅原浩・柿澤亮三著 1993)では、ノスリという名前の由来について、もともとは"のせ"で野の上を滑翔するので野擦りと表したのだろうと推測しています。地面すれすれを飛ぶ鳥ということでは、河北潟では低空を飛翔するチュウヒを連想してしまいます。同書ではチュウヒについては、「低く飛ぶので中飛ではないかと思われるが、鳴声によるものともいわれる」と書かれています。また、出典は不明ですが、チュウヒを「宙飛」であり、実は、餌を捕るときに上空でホバリング(停飛)をするノスリが宙飛で、地面すれすれを飛ぶチュウヒが野擦りだったという説もあります。河北潟の冬には、ノスリもチュウヒもいっぱい飛んできます。河北潟でノスリとチュウヒを見ていると、その行動からは確かにノスリとチュウヒが入れ替わってもおかしくないように思います。でも、チュウヒのヨシ原の上や平坦地の上空をゆったりとグライダーのように飛ぶ姿は、まさに「宙を飛ぶ」という言葉が合います。またノスリは地面を走るネズミを捕ろうとするときに、お腹がすれそうなくらい地面すれすれを飛んで着地することがあります。そのような行動からは野擦りが合っているように思います。いずれにしても昔の人は、鳥の生態をよく観察していたのだと感心させられます。

ところで、この冬は大陸からケアシノスリが20羽ほどやってきました。毎年、河北潟では1~2羽のケアシノスリが越冬しているようですが、まとまった数で越冬したのは初めてでした。大陸の寒波を逃れて日本にやってきたといわれています。ノスリとケアシノスリは同じネズミを餌にしますが、お互い干渉し合うことはあまりありません。

しかしケアシノスリ同士は、縄張りをつくっていて、自分の縄張りに侵入してきたケアシノスリを攻撃する姿がよくみられました。一方、ノスリ同士は争うこともなく、のんびりしているように見えます。この違いはなぜでしょう。

ノスリはあまり動かずに餌を狙って捕りますが、ケアシノスリは広い範囲を飛びながら餌を探します。おそらく、一羽が餌を捕るのに必要とするエリアが広いのでしょう。河北潟でみられたケアシノスリはそのうち段々と数が減りました。1月はじめには30羽ほどいましたが、3月には数羽しか見られなくなりました。河北潟の環境やネズミの生態が、ケアシノスリよりもノスリの捕食戦略に合っているのかもしれませんが。

(文 高橋 久)